

骨髓採取の際のものと同じです。

b) 手術手技に関連する副作用

これは細胞移植を行わない血管柄付き骨移植術において考えられる副作用と同じです。

・骨折：壊死病巣を搔爬する際の大腿骨骨折あるいは移植骨を採取する際の腸骨骨折が生じる可能性があります。大腿骨の場合は追加の処置（骨折固定術など）が必要となります。腸骨骨折は保存的に治療します。

・神経や血管の損傷

④ 移植手術後の副作用

a) 移植した細胞による拒絶反応

あなた自身の細胞を使用しますので、移植した後に免疫抑制剤などを使用する必要はありません。しかし細胞培養という体の外で行われた操作により、細胞が変化したため、移植した細胞が拒絶され、そのための反応（発熱、悪寒、吐き気、疲労感、急激な血圧の変動など）が出る可能性があります。

b) 移植細胞が原因と考えられる感染

細胞を増やす操作は、無菌条件下で細心の注意を払って行われ、細胞が感染していないかについては、定期的に所定の検査法により確認します。しかし、培養終了時点において検出できなかった感染が、移植後に明らかになってくる可能性があります（発熱、手術部位に膿が溜まるなど）。抗生物質投与等の保存的治療法により、感染が制御できない場合は、研究から離脱し、追加手術が必要となる可能性があります。

c) 移植細胞が原因と考えられる腫瘍の発生

現在、国内外のいろいろなところで、間葉系幹細胞を用いた治療が行われていますが、これまでのところ、間葉系幹細胞を移植してがんが発生したという報告はありません。しかし細胞を増やす間に、遺伝子に変化が起こってがんになりやすい細胞に変化してしまう可能性は考えられます。どのような変化が起きるとがんになるのかについては、よくわかっていませんが、今回の試験では移植細胞について染色体の検査をおこないます。また、マウスへ移植して造腫瘍性を調べる予定です。異常な結果が得られた時には、すぐにあなたにその内容を説明し、そのまま治療試験を継続するか、あるいは移植した組織を手術で